



化学者の共通語

●
中村 聡

Satoshi NAKAMURA

沼津工業高等専門学校 校長, 東京工業大学 名誉教授, 2019 年度・2020 年度日本化学会 副会長



「世界の共通語は“イングリッシュ”ではなく、“ブローケン・イングリッシュ”である」というのが三島良直先生（日本医療研究開発機構（AMED）理事長，前東京工業大学長）の口癖であった。もちろんコミュニケーションの共通語としての言語（特に英語）の重要性を否定するつもりは毛頭ないが，筆者は最も重要なコミュニケーションの共通語は“ロジック”であると考えている。少なくとも科学技術の世界におけるコミュニケーションはロジックの上に成り立っていると言えよう。中学生時代の筆者は暗記の少ない物理が好きで，暗記の多い化学や生物などはあまり好きではなかった。高等学校では大学受験を意識して物理と化学を選択した。そして，勉強を進めていくにつれ，化学は決してすべてが暗記ではなく，一部だけ暗記すれば後はロジックで理解できることに気づき，だんだん化学の魅力に惹かれていった経緯がある。そのようなわけで，30年間勤務した東工大の研究室においても，学生には常にロジックの重要性を説いていた。

高等専門学校は全国で57校（国立51校，公立3校，私立3校）あり，大学と同じ高等教育機関に属する。中学校卒業後の15歳の学生を受け入れ，実験・実習を重視した5年間一貫の専門教育を施すことで，20歳の卒業時には大学とほぼ同程度の専門知識・技術を身につけさせることが特徴である。高専という学校はメジャーな存在ではないが，国立高専だけでも毎年1万人もの卒業生を輩出しており，社会的なインパクトは決して小さくない。そして，“高大一貫”とも言える高専の教育制度は日本独自のものであるが，最近は海外でも“KOSEN”として注目され，日本型高専教育制度を本格的に採用した海外版KOSENがタイ王国ですでに2校開校するに至っている。

筆者は東工大を定年退職後，縁あって昨年より沼津工業高等専門学校に勤務している。高専入学時にはまだ幼さを漂わせていた学生が，5年後の卒業時には立派な技術者の卵となって社会に羽ばたいていく。その急激な成長を目の当たりにできるのが，高専教員ならではの醍醐味だと思う。高校生と同年代の低学年学生はとかく感情で物事を考えがちであるが，筆者はここでもコミュニケーションの共通語としてのロジックの重要性を説こうとしている。沼津高専は国立高専第1期校の1つとして昭和37年に設立され，来年は創立60周年の還暦を迎える。沼津高専では約半数の学生が民間企業に就職するが，残りの半数は大学等に進学する。このことから，高専の果たすべき役割は60年前に比べて大幅に拡大していることがわかる。これからも高専卒業生が社会で活躍し続けるために，コミュニケーションの共通語としてのロジックを高専学生に根付かせたいものである。

© 2021 The Chemical Society of Japan